新年早々に組織委員会が立ち上げられ、本協議会の会員や理事の先生方が各委員会の構成委員として活動されると思います。よろしくご協力下さい。会場は事務局と厚生労働省から近い東京近辺、開催日は9月の残暑を避けた10月初～中旬が予定されています。

この国際がん登録学会は、日本での第1回目の当時とは異なり、地域がん登録の必要性が一般の方々にも注目されつつあることから、準備期間2年半という時間と 2010 年の開催年は、私ども地域がん登録関係者にとっては大変重要な時期であり、意義のある学会にする必要があります。このような意味でも、会員諸兄姉や理事の皆様の今後のご協力を切にお願いする次第です。

IACR 第 6 回総会（1984 年）の概要と反省ー第 32 回総会に備えて#

藤本　伊三郎

はじめに

第 32 回 IACR（国際がん登録学会）総会を 2010 年（平成 22 年）に日本で開くよう IACR 理事会で要請されたと聞き、1984 年（昭和 54 年）福岡市で第 6 回 IACR 総会を開いた時の苦汁の経験を思い出し、「前車の轍を踏まない」よう、第 6 回の記録を残すことにした。会長（重松峻夫当時福岡大教授）が既に亡くなられているため、花井彩博士*保管の資料を基礎とし、藤本と花井博士との記憶に頼って、本文を作成した。

第 6 回 IACR 総会（1984 年）の概要

1. 開催年、場所、関係団体、委員会など

IACR 第 6 回総会は、1984 年 9 月 27～29 日に、福岡市ガーデンパレス（ホテル）で開催された。

会長は重松峻夫教授、後援団体は厚生省、福岡県、福岡県医師会、福岡市（政令市）、福岡市医師会、福岡対がん協会で、実施面では福岡大学、産医大、佐賀大、関連学会（後述）などであるが、その他に、厚生省がん研究費よる「地域がん登録研究班」が大きな役割を果たした。また、組織委員会、開催地組織委員会を立ち上げ、顧問、事務局など体制を整えた。

2. 総会のプログラム

当時既に日本では、地域がん登録研究班が、精度の高い登録のデータを基礎としてがん罹患数・率の全国推計および将来推計方式を作り上げ、毎年公表していた。また、登録データを用いて、病理疫学研究、がん検診の精度管理および評価、などの研究も開始されていた。これらを日本で開かれる総会にて報告するべく、総会の第1主題は「地域がん登録資料の多面的利用と、その時の問題点」とし、第 2 主題には、「各国における地域がん登録の現況」をとりあげた。

3. 参加人員数

総会には計 172 人（海外 43、国内 129）の参加を得た。国内外から多くの人に参加してもらうため、総会の公用語は日本語または英語とし、同時通訳を採用した。講演者には、翻訳者のために事前に、抄録とともに全文（和または英文）を提出してもらうように依頼した。

4. 同時通訳方式

第 6 回総会で同時通訳方式を採用し、イヤホンは希望者全員に配布することにしたが、当時は、総会会場にそのための設備がなく、また、3 日間にわたって同時通訳を受託しうる業者も福岡周辺にはなく、結局、通訳放送設備と通訳者とは大阪の業者と契約した。そのために経費は相当高くなり、演者にも前述のように演説原稿の事前提出を依頼することになった。

5. 冊子の配布

IACR 総会では、開催国の地域がん登録制度の概況、その成績などをまとめた資料を、総会参加者に配布する場合が多い。わが国では、既述のように「地域がん登録」研究班が全国がん罹患数・率を推計していたので、この研究班が「Cancer incidence in Japan, 1975-1979, written by Fukuma, Hanai et al」を冊子として作成し、総会参加者全員に配布した。

6. 総会事務局

総会開催までは、福岡大公衆衛生学教室に事務局を置き、総会開催中はホテル・ガーデンパレス内に移動

＃ ：（編集：西信雄）著者の許可をえて元原稿を事務局で短くした。全文は http://www.cancerinfo.jp/jacr/shiryo.html に掲載した。

＊ ：当時大阪府がん登録室長、後に IACR アジア地域代表理事、IACR 事務局長、地域がん登録全国協議会事務局長、同顧問を歴任。

した。総会専用のゼロックス機を借入れ、ホテルに持ち込み、講演者の当日配布用資料のコピー作業などに備えたが、これが多忙を極め、機械はフル運転した。

7. 委員間の連絡

組織委員会、国内委員会の各委員間の連絡、通報には、先ず中軸として、IACR（Muir 博士）と大阪府がん登録室（花井博士、藤本）との間に Telex システムを設け、前者が組織委員間の連絡を担当し、後者が国内委員間の連絡を担当した。

8. 経費

総会開催のための経費は、IACR からの開催助成金、各種団体からの寄付、参加者の経費負担によった。この時、寄付金の募集について、厚生省の応援をえた。なお、経費は、意外に多額となり易いので、次の会の開催準備にあたっても、支出には充分注意されたい。

9. 研究会の開催

「地域がん登録」研究班は、この機会をとらえ、IACR 総会の終了直後に、「がん登録における精度管理とスタッフの研修」に関する研究会を福岡で開催した。第 6 回総会に出席された Young 博士（米国国立がん研究所人口統計解析部、SEER プログラム班長）と Zippin 博士（カリフォルニア大学サンフランシスコ校教授）を講師として招請した。その講演内容は、同研究班の昭和 59 年度報告書（主任研究者福間誠吾）（昭和 60 年 1 月刊行）の藤本、花井共著論文（161-177 頁）の中に、全訳文を掲載している。

前車の轍

1. 第 6 回総会開催までの経緯（協議会サイトに掲載）
2. 総会における日本国としての対応

第 6 回総会において、最も心残りとなったことを、第 32 回総会への要望として述べる。

第 32 回総会では、厚労省がん対策推進本部と国立がんセンター、ならびに地域がん登録全国協議会の三者が集まって、わが国のがん対策の歴史、特に第 1 次～第 5 次実態調査、対がん 10 ヵ年戦略でのがん患者情報の収集についての取り組み、などを述べ、現在、国立がんセンターを中心としたがん登録の全国組織の確立に向けて進んでいることを、総会参加者に紹介してもらいたい。講演者は、対策面は厚労省、技術面は国立がんセンターが担当されることを提案します。歓迎の辞を述べるに止まらず、出席される各国の代表者（又は相当の人）との交流を深めて戴くことを希望します。また、総会実務を担当する方々には、会全体の運営予定の詳細を周知させ、ホスピタリティー（参加者をもてなす態度）の良悪が、参加者に大きな影響を与えることを知ってもらい、実践して戴くことを希望します。こうした対応が、総会参加者の心に、開催国の印象を深く残すものであると考えます。

3. 総会のメイン・テーマ（2 頁脚注＃を参照）

おわりに

以上、第 6 回総会の概況と今に残る反省、ならびに第 32 回総会への要望を申し上げました。お役に立てば、幸せです。なお、紙面をお借りして、第 6 回総会の開催にご協力、ご支援いただいた方々に深謝します。

「5 大陸のがん罹患　第 9 巻」について

柴田　亜希子
山形県立がん・生活習慣病センター
井岡　亜希子
大阪府立成人病センター

国際がん研究機関（IARC）編集による CANCER INCIDENCE IN FIVE CONTINENTS, Volume IX（以下、5 大陸のがん罹患　第 9 巻）が、平成 19 年 11 月 28 日に、製本版に先駆けてインターネット上で公開されました（http://www-dep.iarc.fr）。第 9 巻には、1998 年から 2002 年の世界 58 カ国 219 登録室の罹患データが掲載されています。日本からは、北から、宮城県、山形県、福井県、愛知県、大阪府、広島市、長崎県の 7 登録がデータを提出し、掲載されました。データ提出から掲載までの流れは以下の通りでした。

2006 年 3 月 15 日	IACR メンバーにデータ収集のお知らせ（E メール）
2006 年 5 月 15 日	データの提出締切
2006 年 9～10 月	データ確認
2006 年 11 月	第 1 回集計値の確認
2007 年 2 月	第 2 回集計値の確認
2007 年 7 月初旬	第 3 回集計値の確認
2007 年 7 月中旬	第 4 回集計値の確認（最終）
2007 年 9 月	インターネット上に仮掲載されている内容確認

但し、集計値の確認回数は登録により若干の相違あり